旧城郭における明治以降の曲輪の変容の履歴

－城郭の境界性に関する研究（その1）－

THE DIACHRONIC CHANNELS OF THE TRANSFORMATION
ON THE FRINGE OF JAPANESE CASTLE DOMAINS
IN MODERNIZATION

A study on the boundary meanings in the fringe of Japanese castle domains (Part 1)

朝井美樹*, 永瀬智基**, 久野紀光***

Miki ASAI, Tomoki NAGASE and Toshimitsu KUNO

This study aims to clarify the diachronic channels of the transformation on the fringes of 12 Japanese castle domains with focusing 5 ages among the term which is from Modernization to present age. As the method of the first step to achieve this aim, following three viewpoints are applied to all the 60 moats of the 5 ages of each 12 fringes.

①:the maintained situation and configuration situation of the ruins on the each bank of all moats

②:the main form-type on the each bank of all moats

③:the combination of form-types on both banks of all moats

And as the second step, having unified the analysis result by three viewpoints above, 17 sorts of forms in the 60 moats are clarified.

Finally, the 12 fringes are arranged using 17 sorts of these forms and 4 models of the diachronic channels about the transformation on the fringes of 12 Japanese castle domains are came to clarify as the conclusion.

Keywords : Japanese castle domains, Moats, Fringes, Diachronic channels, Spatial typology

城郭, 曲輪, 周縁, 変容過程, 類型

1. 序

1-1 研究の背景

我が国における中小・大都市の多くは近世城下町が発展して今日に至っていることは先学^{注1)}より明らかで、近世城下町としての共通の出発点を持つ都市の形成過程をみることは現代における都市を考察する上で重要な意義をもっていると考えられる。

ところで、城下町の核であった城郭は立地環境や歴史的経緯の違い等により千態万状であるが、すべての城郭に通有の要素として周縁に廻らされた堀や土塁・石垣、河川といった構築物が挙げられる。これらは、近世には軍事的防御策としての機能以外に、土地利用のされ方や侍・町人の棲み分けを秩序づけるために曲輪を画定する境界としての役割を担っていた^{注2)}。この境界性は地域制の崩壊とともに必要の意義を失ったと言えるがその現状と変容の過程は明らかではない。さて、そのような興味に触れるにあたって、城郭の境界性を担保する堀・土塁等の残存の状況を把握することは不可欠である。そこで、かつて明確に曲輪を画定していた堀・土塁等^{注3)}の形態的な残存状況から、明治維新や戦災、高度経済成長といった我が国の近

代から現代までの都市改編下における個々の城郭の曲輪の変容を整理し、通時的にその履歴を理解することは、城郭の今日的な境界性を理解する上での基礎的知見となり得ると考えられる。

1-2 研究の目的と方法

たとえば図1のように、郭外側の土塁は取り壊されて街区となっているが郭内側の堀は近世のまま保持されているもの、またはその内外が正反対の様相を呈しているものなどもあり、城郭の曲輪の両岸は同様の変容をみせるわけではない。このように幅員をもった曲輪の変容を理解するためには、曲輪の両岸を郭内側と郭外側に分けて個別に履歴を分析・検討していく必要があると考えられる。以上より、本研究では近世に存在していた曲輪の各岸の履歴を精査することを通じて城郭周縁の変容過程を明らかにすることを目的とする。

なお対象年代とする1900、1930、1960、1990、2010年^{注4)}の5年代における日本の城郭12城郭^{注5)}、計60資料(図2)を分析単位とすることで統一基準による客観的な残存状況の評価を施し、これらを基に変遷を理解する。また1900~1930年をⅠ期、1930~1960年をⅡ期、1960~1990年をⅢ期、1990~2010年をⅣ期とし分析を進める。

* 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科
博士前期課程・学士(芸術工学)

** 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科
博士後期課程・修士(芸術工学)

*** 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科
准教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Design & Architecture, Nagoya City University

Graduate Student, Graduate School of Design & Architecture, Nagoya City University

Assoc. Prof., Faculty of Design & Architecture, Nagoya City University, Dr. Eng.

1-3 既往研究

現在まで近世城郭・城下町に関する研究は多岐にわたっておこなわれており、これに関する文献も非常に豊富である。その多くは歴史文化的、考古学的な視点からの研究が主であるが、都市・空間学的な研究も戦前頃から行われてきた^{注6)}。その中でも複数の城郭の変容を把握し比較検討を行なった研究として例えば矢守の城下町プランの研究^{注7)}があげられる。この論考において矢守は、成立期の違いによって城下町の構造が異なるだけでなく、成立期・完成期・崩落期と同一の城郭においてもその時期によって都市構造に変容がみられるとしており、それらの変容過程を城郭どうしで比較し、類型化を試みている。これは城下町や城郭における変容を把握する点で本研究と近い着眼点を有しており、本研究を論じる上での基礎的研究である。しかし、この研究では城下町が成立する中世末期から昭和初期までの変容を分析の対象としており、それ以降の変容過程についての論考は充分とはいえない。そこで、明治期を含めた近代から現在に至る城郭空間の変容へ注視を向ける本研究は、既往の研究からの発展性・独自性を有していると考えられる。

2. 遺構の圍繞形状

先述の通り、近世では城郭周縁を囲う曲輪によって物的に城郭の領域を画定していたが、曲輪は堀や土塁といった多重の要素の複合によって形成されており、今日ではそれらの残存状況はさまざまである。そこで本章では次章からの分析に先立ち、かつて城郭領域を圍繞した曲輪の経年変化を片岸ごとに分けて検討する。

まず、全 60 資料の曲輪両岸に対し、郭内側の際を郭内輪郭線、郭外側の際を郭外輪郭線と定義する。各々の輪郭線上の堀や土塁、石垣といった遺構がある部分を抽出し、この分布を圍繞性の有無とその形状の観点から概観した結果、[輪郭線の全周またはほぼ全周に遺構があるもの(圍繞)]、[輪郭線のほぼ半周程度に遺構があるもの(半圍繞)]、[断片的に遺構があるもの(断片)]、[全く遺構がない

もの(遺構無し)]の4種^{注8)}として大別することができた(表1)。

これより、郭の内外ともに断片が最多で(郭内側:19/60 資料、郭外側:23/60 資料)、次いで半圍繞(郭内側:17/60 資料、郭外側:20/60 資料)、圍繞(郭内側:15/60 資料、郭外側:14/60 資料)であることがわかる。また、この圍繞、半圍繞、断片の該当数は郭内側と郭外側を比しても特徴的な偏りはみられなかった。

さらに、郭内側と郭外側の遺構の圍繞形状の組合せをみると(表2)、i~ixの9種が看取された。該当数に着目すると、vii:断片-断片(14/60 資料)、i:圍繞-圍繞(12/60 資料)、iv:半圍繞-半圍繞(12/60 資料)が多く、遺構の圍繞形状は郭内側と郭外側で同様の形態を採る傾向(38/60 資料)にあることがわかった(表2太枠部)。

3. 輪郭線の残存状況

前章では城郭周縁の輪郭線に残存する遺構にのみ着目してその平面形状の観点から分析を行ったが、遺構の有無の双方を総じた輪郭線各部についての分析がなされていない。ところで、全 60 資料の郭内輪郭線、郭外輪郭線を概観すると、前章で対象とした「遺構によって物的に輪郭線が保持されている部分(郭内:A、郭外:aとする)」の他に、「遺構はないが街区の境界として輪郭を残している部分(郭内:B、郭外:bとする)」と、「輪郭線とは無関係に街区や街路が敷かれるなどして、その輪郭線を視認できない部分(郭内:C、郭外:cとする)」の3種によって各部を判読できる(表3)。

そこで本章では上記のA、B、C、およびa、b、cといった輪郭線各部の状況を残存形と定義し、全 60 資料の曲輪の状態を把握する。

3-1 主要な残存形

先に述べたように、近世に存在した曲輪の両岸は内外各々3種の残存形を指標にして判読できる。しかし、例えば1900年代における松本城は、郭内側ではA,B,Cの3種で構成されているが、その占有状況に着目してみると輪郭線の周の多くをAの残存形が占めている一方で、1930年代では1900年代と同様にA,B,Cの残存形で構成

図1 分析例 松本城の曲輪の残存状況 (左から1900年、1930年、2010年)

表1 遺構の圍繞形状

圍繞形状	—: 遺構のある部分 (数値は該当資料数)				計
	圍繞	半圍繞	断片	無し	
輪郭線					
郭内側	15	17	19	9	60
郭外側	14	20	23	3	60

表2 圍繞形状の内外の組み合わせ

郭内側	郭外側				計
	圍繞	半圍繞	断片	無し	
圍繞	i 12	ii 3	0	0	15
半圍繞	iii 2	iv 12	v 3	0	17
断片	0	vi 5	vii 14	0	19
無し	0	0	viii 6	ix 3	9
計	14	20	23	3	60

表3 残存形の種類

内外状況	郭内側		郭外側	
	遺構あり	遺構なし	遺構あり	遺構なし
輪郭あり	A	B	a	b
輪郭なし	C	c	c	c

表4 郭内側の主要残存形

主要残存形	A	B	C	計
該当数	32	3	25	60

表5 郭外側の主要残存形

主要残存形	a	a・b	b	c	計
該当数	45	3	7	5	60

表6 主要残存形の内外の組合せ

郭内側	郭外側				計
	a	a・b	b	c	
A	① 32	0	0	0	32
B	0	② 3	0	0	3
C	③ 13	0	④ 7	⑤ 5	25
計	45	3	7	5	60

図2 対象事例地図資料一覧

されているものの、堀の埋め立てや土塁の取り壊しなどによって大部分の遺構が消滅したことで A の残存形の部分が大幅に減少し、代わりに C が占有的な残存形となっている（図 1）。このように、曲輪の状況を理解する際に単純に残存形の有無のみによって捉えることに加え、輪郭線を占める主要な残存形の状況を加味することが必要である。そこで、本節では輪郭線において主要な残存形^{注9)}（以下、主要残存形とする）を郭の内外側の各々で抽出し、分析を進める。

まず、全資料の郭内輪郭線及び郭外輪郭線それぞれにおいて、主要残存形を抽出し統計を施した。表 4 より郭内側では全資料は A であるもの、B であるもの、C であるもののいずれかのみ 3 種に限られ、複数の残存形が拮抗して主要をなすものはなかった。また、該当数に着目すると A を主要残存形とするものが約半数とともっとも多く（32/60 資料）、次いで C の該当数が多かった（25/60 資料）。それに比して B を主要残存形とするものはごく少数であった（3/20 資料）。一方、郭外側では a であるもの、b であるもの、c であるもの、a と b が拮抗して主要な残存形をなしているものの 4 種が看取された（表 5）。この 4 種の該当資料数の内訳をみると a を主要残存形とするものが最も多く（45/60 資料）、その他の b（7/60 資料）や c（5/60 資料）、a・b（3/60 資料）のものは少数であった。

以上より、郭内側では主要残存形が A であるものと C であるもの、すなわち輪郭線の主が遺構によるものと、輪郭線が主に消滅しているものの 2 種に分かれる傾向があるが、対して郭外側ではほとんど多くの資料において主要残存形が a、すなわち輪郭線が主に遺構を多く残しており、輪郭線の消滅が主立つことはあまりみられなかった。すなわち、郭内側に比して郭外側の方が遺構を保持しているものが多いという傾向がみてとれた。

また、郭内側と郭外側の主要残存形の組合せは①～⑤の 5 種の系統にまとめられる（表 6）。①：A—a の組みがもっとも多く（32/60 資料）、次いで③：C—a の組み（13/60 資料）であった。その他④：C—b の組み（7/60 資料）、⑤：C—c の組み（5/60 資料）、②：B—a・b の組み（3/60 資料）がみられたが、いずれも該当数は少数であった。以上のことから、郭内輪郭線の主要残存形が A、すなわち輪郭線が主に遺構によるものである全 32 件の場合、郭外輪郭線の主要残存形はすべて a、すなわち輪郭線が主に遺構によるものである。しかし一方で、郭外輪郭線の主要残存形が a、すなわち輪郭線の主が遺構によるものである全 45 件の場合、必ずしも郭内輪郭線の主要残存形が A、すなわち主要残存形が主に遺構によるものであるとは限らず（32/45 資料）、主要残存形が C、すなわち輪郭線が消滅してしまっているものとの 2 種の組合せに分かれる傾向がみてとれた。

3-2 両岸の組合せでみた残存形とその組成

前節までの分析では、郭内輪郭線および郭外輪郭線の両者の対岸状況を捨象した個別的分析結果として内外の組合せをみることで各資料を捉えてきた。しかし、実際に並走している郭内輪郭線と郭外輪郭線の様相を理解するためには、対岸どうしの輪郭線がどのような向かい合い方をしているのかという観点が必要である。そこで本節では、向かい合う両岸どうし、内外各々 3 種の残存形の組合せ（以降、両岸残存形とする）から A+a～C+c の 9 種の両岸残存形として輪郭線の各部を捉え、これら 9 種を遺構の有無や輪郭線の有無の観点から以下の 3 種のカテゴリに大別した。すなわち、「い：両岸もしくは片岸において遺構による輪郭線である部分（A+a、A+b、

表 7 両岸残存形とそのカテゴリ分類

		遺構あり		遺構なし	
		輪郭あり	輪郭なし	輪郭あり	輪郭なし
郭内側	遺構あり	a	b	c	
	輪郭あり	A+a	A+b	A+c	
	輪郭なし	B+a	B+b	B+c	
郭外側	遺構あり	C+a	C+b	C+c	
	輪郭あり				
	輪郭なし				

表 8 両岸残存形の組成

組成 成分 パターン	カテゴリの有無			該当 数
	い	ろ	は	
ア	○	○	○	29
イ	○	○	×	12
ウ	○	×	○	6
エ	○	×	×	10
オ	×	○	○	3
計				60

凡例 ○：あり ×：なし

表 9 曲輪の残存状況一覧

資料名	曲輪形状			主要残存形		両岸残存形の組成								
	郭内 輪郭線	郭外 輪郭線	残存 パターン	郭内 輪郭線	郭外 輪郭線	残存 パターン	カテゴリの有無							
							い	ろ	は	は	は	は	は	は
久保田1900	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○	○	○	○	○	○	○	イ
久保田1930	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○	○	○	○	○	イ
久保田1960	断片	半円繞	vi	B	a・b	②	○	○	○	○	○	○	○	ア
久保田1990	断片	半円繞	vi	B	a・b	②	○	○	○	○	○	○	○	ア
久保田2010	断片	半円繞	vi	B	a・b	②	○	○	○	○	○	○	○	ア
山形1900	断片	断片	vii	C	c	⑤	○			○	○	○	○	ア
山形1930	断片	断片	vii	C	c	⑤	○			○	○	○	○	ア
山形1960	なし	なし	ix	C	c	⑤				○	○	○	○	オ
山形1990	なし	なし	ix	C	c	⑤				○	○	○	○	オ
山形2010	なし	なし	ix	C	c	⑤				○	○	○	○	オ
宇都宮1900	断片	半円繞	vi	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
宇都宮1930	断片	半円繞	vi	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
宇都宮1960	なし	断片	vii	C	a	③		○	○	○	○	○	○	ア
宇都宮1990	なし	断片	vii	C	a	③		○	○	○	○	○	○	ア
宇都宮2010	なし	断片	vii	C	a	③		○	○	○	○	○	○	ア
水戸1900	半円繞	半円繞	iii	A	a	①	○	○	○		○	○	○	イ
水戸1930	半円繞	半円繞	iii	A	a	①	○	○	○		○	○	○	イ
水戸1960	断片	断片	vii	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
水戸1990	断片	断片	vii	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
水戸2010	断片	断片	vii	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
松本1900	断片	断片	i	A	a	①	○		○	○	○	○	○	イ
松本1930	断片	断片	vii	C	b	④	○			○	○	○	○	ア
松本1960	なし	断片	vii	C	b	④				○	○	○	○	イ
松本1990	なし	断片	vii	C	b	④				○	○	○	○	イ
松本2010	なし	断片	vii	C	b	④				○	○	○	○	イ
駿府1900	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○				○	○	○	エ
駿府1930	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○				○	○	○	エ
駿府1960	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	イ
駿府1990	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	イ
駿府2010	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	イ
高田1900	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○		○	○		○	○	ウ
高田1930	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○		○	○		○	○	ウ
高田1960	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○		○	○		○	○	ウ
高田1990	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○		○	○		○	○	ア
高田2010	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○		○	○		○	○	ア
福井1900	断片	断片	vii	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
福井1930	断片	断片	vii	C	a	③	○	○	○	○	○	○	○	ア
福井1960	断片	断片	vii	C	a	③	○		○	○	○	○	○	ア
福井1990	断片	断片	vii	C	a	③	○		○	○	○	○	○	ア
福井2010	断片	断片	vii	C	a	③	○		○	○	○	○	○	ア
名古屋1900	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
名古屋1930	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
名古屋1960	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
名古屋1990	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
名古屋2010	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
吉田1900	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○			○	○	○	○	ア
吉田1930	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○			○	○	○	○	ア
吉田1960	断片	断片	vii	C	b	④	○			○	○	○	○	ア
吉田1990	断片	断片	vii	C	b	④	○			○	○	○	○	ア
吉田2010	断片	断片	vii	C	b	④	○			○	○	○	○	ア
姫路1900	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○				○	○	○	エ
姫路1930	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○				○	○	○	エ
姫路1960	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	ア
姫路1990	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	ア
姫路2010	半円繞	半円繞	iv	A	a	①	○	○	○		○	○	○	ア
熊本1900	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
熊本1930	半円繞	半円繞	i	A	a	①	○		○					エ
熊本1960	断片	断片	v	A	a	①	○		○					ウ
熊本1990	断片	断片	v	A	a	①	○		○					ウ
熊本2010	断片	断片	v	A	a	①	○		○					ウ

表 10 残存状況の構成類型

図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 10-3 図 10-4		図 10-5 図 10-6		図 10-7 図 10-8		図 10-9 図 10-10		図 10-11 図 10-12		図 10-13 図 10-14		図 10-15 図 10-16	
図 10-1 図 10-2		図 1													

A+c、B+a、C+a)」、「ろ：兩岸のどちらにも遺構による輪郭線は存在していないが、兩岸もしくは片岸において街区等の境界として輪郭線が残存している部分 (B+b、B+c、C+b)」、「は：兩岸のどちらにおいても輪郭線が消滅している部分 (C+c)」である (表 7)。

これら 3 種のカテゴリの該当状況を全 60 資料にて確認し、カテゴリの組合せを整理したものが表 8 である。結果として、「ア：い～は、の全カテゴリによって輪郭線を構成しているもの」、「イ：い、ろ、の二種のカテゴリで輪郭線を構成しているもの」、「ウ：い、は、の二種のカテゴリで輪郭線を構成しているもの」、「エ：い、のみのカテゴリで輪郭線を構成しているもの」、「オ：ろ、は、の二種のカテゴリで輪郭線を構成しているもの」、の 5 種のボタンが看取された (以降、これらを組成ボタンとする)。また、これら組成ボタンの該当数に着目すると、アがもっとも多く (29/60 資料)、次にイ (12/60 資料)、エ (10/60 資料)、ウ (6/60 資料)、オ (3/60 資料) とつづいた。アが全資料の約半数を占めていることから、遺構による輪郭線がある部分、街区等の境界による輪郭線がある部分、輪郭線がない部分、といった 3 種の組成ボタンの併存が多いことがわかる。また、「い」のみの組成である組成ボタン・エの該当数は少数であり、かつ「ろ」のみの組成や「は」のみの組成はみられなかったことから、単数カテゴリによる組成であるものは僅少であるといえる。

4. 輪郭線の残存状況の構成類型の抽出

前章までに各々検討した遺構の図形形状、主要残存形、両岸残存形の組成の指標を総合したものが表 9 である。これを基に縦軸に主要残存形の内外の組合せ①～⑤系統を、横軸に図形形状の内外の組合せ i～ix を据えて整理した結果 (表 10)、まず 13 種の類型が抽出された (表 10 太枠部)。さらに両岸残存形の組成を加味することによって 17 種の構成類型を導いた (表 10 点線枠部)。

①系統に分類される①-i～①-v は郭内側、郭外側ともに輪郭線が主に遺構として残っているものである。①-i は郭内側、郭外側ともにほぼ全周に遺構が残存しているものであり、組成ボタンがイで

ある①-i-イと組成ボタンがエである①-i-エの 2 種がある。①-ii は郭内側が環状に、郭外側では半周程度を遺構が廻っているもので、組成ボタンがアである①-ii-アと組成ボタンがエである①-ii-エの 2 種にさらに分類される。①-iii は①-ii と反対に、郭内側に半周程度、郭外側は環状に遺構が廻っているという構成をもつものであり、組成ボタンはイであるため①-iii-イと表記する。①-iv は郭内側、郭外側ともに半周程度遺構が廻る構成であり、組成ボタンがアである①-iv-ア、イである①-iv-イ、ウである①-iv-ウの 3 種で構成されている。①-v は郭内側においては半周程度遺構が廻り、郭外側では大きくまとまって連続的に遺構が残存するのではなく断片的に遺構を残すという構成をとるものである。この型の組成ボタンはおしなべてウであるので①-v-ウと表記する。

②系統の類型②-vi は郭内輪郭線において断片的に遺構があるものの輪郭線は主に街区等による境界であり、郭外側では半周ほどの遺構がある部分と街区等の境界となる部分が同程度みられるものである。また、組成ボタンはアであるもののみであり②-vi-アと記す。

③系統から⑤系統に属する類型③-vi～⑤-ix は郭内輪郭線が主に消滅しているもので、そのうち郭外輪郭線の主な部分に遺構が残っているものが③-vi～③-viii、街区等の境界としてかたちを変えて残っているものが④-vii、④-viii、郭外輪郭線においても主な輪郭線が消滅しているものが⑤-vii、⑤-ix である。③-vi は郭内側において断片的に、郭外側においては半周ほど連続的に遺構を残す構成で、③-vii は兩岸とも断片的な遺構を残しているものである。また③-viii は郭外側では断片的に遺構を残しているものの、郭内側においては一切の遺構を残していない。また、③系統の類型は組成ボタンがおしなべてアの型であるためそれぞれを③-vi-ア、③-vii-ア、③-viii-アと表される。④-vii は郭内側、郭外側ともに断片的な遺構をもつもので、かつ組成ボタンはアである。④-viii は郭外側に断片的な遺構をもつものの、郭内側においては一切の遺構を残していないという構成のものであり、組成ボタンはイであった。⑤-vii は郭内側、郭外側ともに断片的な遺構の残存がみられるもの、⑤-ix は郭内側、郭外側ともに

一切の遺構を残していないものである。⑤・Ⅶは組成パターンがア、⑤・Ⅸは組成パターンがオという型であった。

以上、郭内輪郭線、郭外輪郭線のそれぞれの、主な残存形、遺構の圍繞形状のあり方、両岸残存形の組成を検討することで 17 の残存状況の構成類型を抽出することができた。

5. 曲輪の残存状況の変遷

前章で得られた 17 種の残存状況の構成類型から城郭ごとの変遷をまとめ(表 1 1)、各々の城郭における曲輪の変容履歴を把握し、さらに全 12 城郭の変容履歴における共通性と差異を明らかにする。

5-1 残存状況の構成類型の変容

まず、城郭の曲輪が年代の変化に伴ってどのような変容を経てきたのかを理解するために、前後する年代間での残存状況の構成類型の変容、すなわち主要残存形、圍繞形状、組成パターンのいずれかがかわるという変容(以降、類型変容とする)を抽出すると、10 城郭、全 15 件の類型変容が抽出された(表 1 1 太線部)。

そこで、城郭ごとの類型変容の回数を分析すると、類型変容の回数は 0 回、1 回、2 回の 3 種が看取され、3 回以上の変容をする城郭はなかった。変容回数が 0 回の城郭は 2 城郭(福井城、名古屋城)、1 回の城郭は 5 城郭(山形城、宇都宮城、水戸城、高田城、吉田城) 2 回の城郭は 5 城郭(久保田城、松本城、駿府城、姫路城、熊本城)であった。変容回数が 1 回および 2 回の城郭はと同数該当したが(いずれも 5/12 城郭)、それに比して変容回数 0 回の城郭は少ないといえる(2/12 城郭)。

また、変容の時期に着目すると、0 回変容の 2 城郭を除く、全 10 城郭のうち、9 城郭においてⅡ期に変容が起こっている。また、Ⅰ期に変容が起こる城郭は 4 城郭、Ⅲ期に変容が起こる城郭が 2 城郭であり、Ⅳ期に類型変容がみられる城郭はなかった。これより、1 回変容の城郭ではその曲輪の変容はⅡ期に起こる傾向にあり、2 回変容の城郭はⅡ期の変容とⅠ期もしくはⅢ期での変容の組合せによって捉えることができる。

さらに、これらの類型変容が具体的にどのような変容であったのかを理解するために、変容のあった前後の差異から各々の類型変容に対して意味付けを行なう(表 1 1-付表)。

まず、両岸の主要残存形の変容を伴わない圍繞形状または組成パターンの変化すなわち同系統(両岸の主要残存形が同一)の類型間の変容〔同系変容〕か、主要な残存形の変化を伴う異系統(両岸の主要残存形が不同)の類型間の変容〔異系変容〕かという観点で 2 種に分類することでその類型変容の規模を把握する。また、同系変容の場合、両岸の輪郭線が主に遺構である①系類型間での変容〔両岸残存〕と、郭外輪郭線が主に遺構である③系類型間での変容〔片岸残存〕、両岸とも遺構が主に消失している④系⑤系の類型間での変容〔両岸僅少残存〕、という 3 種に区別して捉えることができる。異系変容も同様の視点で、郭内輪郭線の主にあった遺構は消滅するが郭外輪郭線の主が遺構によっている状態が継続する①系から③系への変容〔片岸消失〕と、両岸の輪郭線の主にあった遺構が消滅する①系から②系、④系への変容〔両岸消失〕の 2 種の変容として捉えられる。このような分類を 15 件の類型変容に施したところ、同系変容は(11/15 件)、異系変容(4/15 件)に比して頻発することがわかった。また、同系変容については 11 件中 8 件が①系どうしの変容

表 11 城郭ごとの構成類型の変遷

城郭名	年代	Ⅰ期					変容回数	変容時期
		1900	1930	1960	1990	2010		
久保田城	主	①	①	②	②	②	2	Ⅱ
	副	Ⅰ	Ⅳ	Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ		
	組成	イ	イ	ア	ア	ア		
山形城	主	③	③	③	③	③	1	Ⅱ
	副	Ⅶ	Ⅶ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		
	組成	ア	ア	オ	オ	オ		
宇都宮城	主	③	③	③	③	③	1	Ⅱ
	副	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ		
	組成	ア	ア	ア	ア	ア		
水戸城	主	③	③	③	③	③	1	Ⅱ
	副	Ⅲ	Ⅲ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ		
	組成	イ	イ	ア	ア	ア		
松本城	主	①	④	④	④	④	2	Ⅰ
	副	Ⅰ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ		
	組成	イ	イ	イ	イ	イ		
駿府城	主	①	①	①	①	①	2	Ⅰ
	副	Ⅰ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ		
	組成	エ	イ	イ	イ	イ		
高田城	主	①	①	①	①	①	1	Ⅲ
	副	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ		
	組成	ウ	ウ	ウ	ア	ア		
福井城	主	③	③	③	③	③	0	-
	副	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ		
	組成	ア	ア	ア	ア	ア		
名古屋城	主	①	①	①	①	①	0	-
	副	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		
	組成	エ	エ	エ	エ	エ		
吉田城	主	①	①	④	④	④	1	Ⅱ
	副	Ⅳ	Ⅳ	Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ		
	組成	ア	ア	ア	ア	ア		
姫路城	主	①	①	①	①	①	2	Ⅱ
	副	Ⅰ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅱ		
	組成	エ	エ	ア	ア	ア		
熊本城	主	①	①	①	①	①	2	Ⅱ
	副	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ		
	組成	エ	エ	ウ	ウ	ウ		
変容件数		4 件	9 件	2 件	0 件		15	

表 11-付表 類型の変容パターン

変容パターン	構成類型の変容	城郭・時期
同系変容	①-Ⅰ-Ⅰ ①-Ⅰ-Ⅰ	久保田城Ⅰ 駿府城Ⅱ 姫路城Ⅱ
	①-Ⅰ-Ⅰ ①-Ⅰ-Ⅰ	駿府城Ⅰ
	①-Ⅰ-Ⅰ ①-Ⅱ-Ⅰ	熊本城Ⅰ
	①-Ⅱ-Ⅰ ①-Ⅱ-Ⅰ	熊本城Ⅱ
	①-Ⅳ-Ⅰ ①-Ⅱ-Ⅰ	姫路城Ⅲ
	①-Ⅳ-Ⅰ ①-Ⅳ-Ⅰ	高田城Ⅲ
	③-Ⅵ-Ⅰ ③-Ⅵ-Ⅰ	宇都宮城Ⅱ
	④-Ⅶ-Ⅰ ④-Ⅶ-Ⅰ	松本城Ⅱ
	⑤-Ⅶ-Ⅰ ⑤-Ⅰ-Ⅰ	山形城Ⅱ
	①-Ⅲ-Ⅰ ③-Ⅵ-Ⅰ	水戸城Ⅱ
異系変容	①-Ⅰ-Ⅰ ④-Ⅶ-Ⅰ	松本城Ⅰ
	①-Ⅳ-Ⅰ ②-Ⅵ-Ⅰ	久保田城Ⅱ
	①-Ⅳ-Ⅰ ④-Ⅶ-Ⅰ	吉田城Ⅱ
	①-Ⅳ-Ⅰ ④-Ⅶ-Ⅰ	吉田城Ⅱ

である〔両岸残存〕の変容であり、大半を占めていることがわかった。異系変容では〔片岸消失〕が 1 件、〔両岸消失〕が 3 件であり、〔両岸消失〕への若干の偏りをみてとることができた。

5-2 城郭における曲輪の変遷の型

前節で分析した観点を照合することで各城郭の曲輪の変遷を性格付け、さらに城郭どうしの共通性や差異を明らかにする。類型変容の回数(図 3 横軸)、類型変容の時期(図 3 中破線部)、類型の変容パターン(図 3 中太線部および細線部)の 3 つの観点の重ね合せから城郭の変遷のしかたを性格付ける変遷タイプ 10 種が抽出された。<変遷タイプ・**う**、**え**、**お**、**か**、**き**>は類型の変容が 1 回起こるもので、この変容は<変遷タイプ・**う**>を除く、概ねすべての城郭においてⅡ期に起こる。<変遷タイプ・**う**>は①系類型間の変容が起こるもので、これには高田城が該当した。また、変化時期はⅢ期であった。<変遷タイプ・**え**、**お**>は①系類型から他系類型への異系変容を伴うものである。中でも<変遷タイプ・**お**>は〔片岸消失〕という①系類型から③系類型への変容であり、郭内輪郭線の主にあった遺構は大きく消滅するものの、郭外輪郭線においては主であった遺構がそのまま維持するという変容が起こる型であり、水戸城がこれに該当する。<変遷タイプ・**か**>は③系類型間での同系変容が起こるもので、宇都宮城がこれに該当する。<変遷タイプ・**き**>は⑤系類型間の同系変容が起こるものである。つまり 1900 年時点においてすでに両岸ともに輪郭線が消滅しているおり、その類型のまま現代に継続されるという型で、山形城が該当した。

<変遷タイプ・**く**、**け**、**こ**>は、類型の変容回数が 2 回のものである。中でも<変遷タイプ・**く**、**け**>は 2 回の変容のいずれれもが①系類型間の同系変容である。<**く**>はⅡ期とⅢ期に変化がおり(姫路城が該当)、<**け**>はⅠ期とⅡ期に変容が起こるもので、駿

図3 城郭の曲輪の変遷パターン

府城と熊本城が該当した。＜変遷パターン・□＞はⅠ期とⅡ期に変容があり、変容パターンは同系変容と異系変容が1回ずつである。

また、これらの変遷パターンどうしの関係を捉えと、＜変遷パターン・あ、う、く、け＞は類型変容の回数に関わらず「全年代を通じて両岸の輪郭線の遺構の多くが残存し続ける」という城郭群であり、また＜変遷パターン・い、お、か＞は形式変化の回数に関わらず「全年代を通じて片岸の輪郭線の遺構の多くが残存し続ける」という城郭群であるといえる。

さらに＜変遷パターン・え、お、こ＞は異系変容を伴うものである。つまり、1900年代には保持されていた曲輪の両岸の遺構が、＜え、こ＞では両岸において、＜お＞では片岸において、ある年代で大きく減少するという城郭群であるといえる。

以上、構成類型の変遷として「類型変容の回数」、「類型変容の時期」、「類型の変容パターン」という3つの観点の検討を通じて、「全年代を通じて曲輪の両岸において遺構による輪郭線が多く残存し続ける型」、「全年代を通じて曲輪の片岸において遺構による輪郭線の多くが残存し続ける型」、「全年代を通じて曲輪の両岸の輪郭線の多くが消滅している型」、といった変容の有無にかかわらず1900年～現在に至るまで通底する要素の枠組みと、「1900年代有していた曲輪の遺構による輪郭線が、ある年代に大きく減少する型」といった大きく変容した履歴の有無についての枠組みによって城郭の曲輪の輪郭線の変容を整理することができた。

6. 結

本研究では、日本の城郭周縁の曲輪の両岸を輪郭線と郭内側と郭外側に分けて、その遺構の圍繞の形状や、主要な残存形とその組成から輪郭線の残存状況を検討した。また、それら分析の重ねあわせから曲輪の残存状況として17の構成類型を抽出した。さらに、城郭

ごとに構成類型の変容の回数やその時期、変容の内容といった観点で捉え、それらを総合的に検討することで変遷のパターンを抽出した。

その結果、10種の変遷の型が見出されたが、これらの型を概観した大きな枠組みとして捉えと、残存形式変化の有無に関わらず「全年代を通じて曲輪の両岸において遺構による輪郭線が多く残存し続ける型」、「全年代を通じて曲輪の片岸において遺構による輪郭線の多くが残存し続ける型」、「全年代を通じて曲輪の両岸の輪郭線の多くが消滅している型」といった変容の有無にかかわらず1900年～現在に至るまで通底する要素の枠組みを把握できた。またこれらの枠組みと重ねて、「1900年代有していた曲輪の輪郭線が、ある年代に大きく減少する型」といった比較的大規模な変容が起こって現代に至っているものといった枠組みを見出した。

以上、近世の城郭領域が明治から現代に至るまでたどってきた複数城郭の変容の履歴を精査し、城郭間に存在する共通性と差異を把握することによって各々の城郭の変容の性格を明らかにした。

ところで、冒頭に述べたように近世の城郭空間において、本稿で興味対象としたような曲輪という物的境界は軍事的防御の役割を除くと、侍や町人の棲み分けの地域制や土地利用の仕方を明確にするための一つの手段であったといえる。しかし、近代から現代にかけて生じた曲輪の変容が、例えば土地利用の観点における境界性など、都市骨格においていかなる寄与をしているかは定かではない。本研究の知見を踏まえて、今後の課題として議論する必要がある。

参考文献

- 1) 矢守一彦：都市プランの研究，大明堂，1970
- 2) 矢守一彦：城下町のかたち，筑摩書房，1988
- 3) 矢守一彦：城下町，学生社，1972
- 4) 矢守一彦：城下町ノート，古今書院，1972
- 5) 矢守一彦：日本城郭史研究叢書—城下町の地域構造，名著出版，1987
- 6) 藤岡通夫：城と城下町，中央公論美術出版，1988

- 7) 藤岡謙次郎：城下町とその変貌，柳原書店，1983
- 8) 小林清治：福島大学学芸学部論集 社会科学－いわゆる「城下町」の構造，福島大学学芸学部，1957
- 9) 小野均：近世城下町の研究，至文堂，1928
- 10) 豊田武：日本の町 その歴史的構造―城下町の機能と構造，地方史研究協議会／編，1958
- 11) 豊田武：日本の封建都市，岩波全書，1952
- 12) 材野博司：都市の町割，鹿島出版，1989
- 13) 矢崎武夫：日本都市の発展過程，弘文堂，1962
- 14) 原田伴彦：中世に於ける都市の研究，講談社，1942
- 15) 岡田鎮太：近世城下町名古屋，金城学院大学，1961
- 16) 伊藤ていじ：城とその町[再刊]，淡交新社，1963
- 17) 佐藤滋：城下町の近世まちづくり，鹿島出版会，1995
- 18) 高橋康夫ほか：図集 日本都市史，財団法人 東京大学出版会，1993
- 19) 西ヶ谷恭弘：日本名城図鑑，理工学社，1989
- 20) 平井聖監修：図説 日本城郭大事典 1～3，株式会社日本図書センター，2000
- 21) 植野糾ほか：際の都市論，山海堂，1996
- 22) 株式会社新創社：城下町時代MAP 関東編，株式会社 P H P 研究所，2010
- 23) 株式会社新創社：城下町時代MAP 上方面，株式会社 P H P 研究所，2011
- 24) 小松芳郎：松本市 100 年地図帖，しなのき書房，2007
- 25) 渡部景一：秋田市歴史地図，無明舎出版，1984
- 26) 松浦健治郎・二之湯裕久・浦山益郎：戦災復興事業前後における官庁街の立地と空間構成の変容，日本建築学会計画系論文集，Vol 71，No 608，pp. 89-96，2006. 4 などの一連の研究

注

- 注 1) 参考文献 1) ～16) など
- 注 2) 矢守は参考文献 1) p286 において「地域制―これは(中略)具体的な画定線として多くの場合畠堀がもちいられていること、濠には自然の水系をたくみに改編し利用している」と述べている。
- 注 3) 本稿で扱うのは武家地と町人地の地域制を物理的に画定する外郭の堀や河川、土塁・石垣といった要素である。例えば姫路城のような惣構えをもつ城郭においては惣構えを構築する外堀ではなく、武家地を囲う中堀を対象としている。なお、分析対象とする畠堀よりも城内側の領域を「郭内」、外側の領域を「郭外」と定義している。
- 注 4) 対象年代は明治維新後の畠堀をみるために 1900 年頃、第二次世界大戦直前の軍事利用の状況についてを 1930 年頃、第二次世界大戦復興を概ね果たしたとされる 1960 年頃、バブル経済の都市改編についてをみるために 1990 年頃を 2010 年現在と合わせた 5 年代を設定することで近代以降の我が国の歴史的事変に伴う都市改編を追従できると考えられる。また、それぞれの資料において情報量のバラつきを防ぐために複数の地図や航空写真等の史料(別表参照)を用いていることなどから、各年代における資料は概ね 5～10 年前後の年代的なズレを許容するものとする。
- 注 5) 本研究は全国の複数の城郭とその周辺の変遷を相対的に論考するため、分析対象とする城郭間で著しく都市規模の異ならないように、また、明治初期での旧城下町の骨格に大きな差異がないように、以下 4 観点を選定条件とした全 12 城郭を分析対象とした。すなわち、「江戸(東京)、京都、大坂(大阪)の三都を除く地方城郭であること」「明治 6 年の廃城令にて存城処分となった城郭であること」「現在、政令指定都市・中核市・特例市のいずれかの都市に立地している城郭であること」「武家地と町人地を分かつ地域制の境界として機能する堀・塁等により城郭領域が圍繞されていた平城または平山城の城郭であること」である。
- 注 6) 参考文献 9) など
- 注 7) 参考文献 1) など
- 注 8) 各資料におけるもっとも大きな連続した遺構のまとまり(直行街路等による分断を除く)を抽出する。その遺構のまとまりが城郭の全周または全周の約 7 割以上を覆っているものを〔圍繞〕、4 割～7 割程度のものを〔半圍繞〕、4 割以下のものを〔断片〕とし、一切の遺構がないものを〔遺構無し〕と定義する。
- 注 9) 残存形 A、B、C (a、b、c) にわけられた輪郭線の各々の総長を算出し、それが最も大きい残存形を主要残存形とする。また久保田城郭外輪郭線では残存形 a と b の差異が 1%程度と非常に僅少であったため、拮抗した主要残存形として「a・b」を抽出した。その他の城郭ではそのような例はみられなかった。

別表 参考史料一覧

地域	対象年代	出版西暦	資料名	出版社および所蔵者
久保田	1900 年	1901 年	秋田市詳細地図 附商工人明記	秋田市系町欄ノ丁廿一番地大森印刷
		1902 年	秋田市治一覧表付図「秋田市全図」	秋田市役所
		1903 年	秋田市全図信用確実営業家秋田市明細案内	秋田市系町欄ノ丁三番地長倉源藏
	1930 年	1927 年	秋田市全図	秋田市都市計画課
		1932 年	秋田市住宅地図	不明
		1962 年	秋田市住宅明細図	東武交通事業社
	1990 年	1989 年	秋田市ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	秋田市2 (北部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	山形市2 (南部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
	山形	1899 年	実地測量山形市内全図	個人所蔵
		1901 年	大日本帝國陸地測量所 山形・漆山	文理館
		1907 年	実地測量山形市内全図	個人所蔵
		1925 年	最新 山形市明細図	山形県立博物館
		1927 年	最新 実測 山形市全圖	個人所蔵
		1929 年	山形市街圖	山形市立第一小学校
		1937 年	最新 山形市全圖	国立国会図書館
		1961 年	山形市住宅詳細図	三洋堂
		1990 年	山形市―ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	山形市2 (北部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
宇都宮	1900 年	1902 年	宇都宮市街圖附松木縣管内各圖	岐阜県図書館
		1907 年	宇都宮市街全圖	岐阜県図書館
		1912 年	宇都宮市全圖	不明
	1930 年	1931 年	宇都宮市及郊外全圖	岐阜県図書館
		1926 年	宇都宮市及郊外全圖	近代デジタルライブラリー
		1931 年	宇都宮市及郊外全圖	集英堂書店
	1960 年	1961 年	宇都宮市住宅詳細図	三洋堂
		1990 年	宇都宮市 (北部) ゼンリンの住宅地図	日本住宅地図出版
		1990 年	宇都宮市 (南部) ゼンリンの住宅地図	日本住宅地図出版
	2010 年	2012 年	宇都宮市1ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2012 年	宇都宮市2ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2010 年	水戸市街改正略図	不明
水戸	1900 年	1890 年	水戸市街改正全圖	不明
		1901 年	水戸市街改正全圖	不明
		1906 年	水戸市街改正全圖	岐阜県図書館
	1930 年	1909 年	水戸市現勢地図	不明
		1920 年	水戸市全圖	水戸市立博物館
		1922 年	水戸市全圖	不明
		1923 年	水戸市全圖	水戸市立博物館
		1923 年	水戸市全圖	岐阜県図書館
		1925 年	水戸市全圖	水戸市立博物館
		1925 年	大日本職業別明細圖の内 水戸市	岐阜県図書館
		1935 年	水戸市及び三共全圖	水戸市立博物館
		1962 年	水戸市住宅詳細図	三洋堂
		1990 年	水戸市 (東部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	水戸市3ゼンリン住宅地図	ゼンリン
松本	～1900年	1835 年	松本城下圖	長野県立歴史館
		1889 年	松本町全圖	松本市立博物館
		1889 年	松本市街全圖	不明
	1930 年	1912 年	松本市全圖	個人所蔵
		1929 年	松本市街地圖	松本市文書館
		1931 年	松本市全圖	松本市文書館
	1960 年	1960 年	松本市住宅案内図	地地刊行会
		1990 年	松本市ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	松本市1ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
	1900 年	1878 年	銅鑄静岡市坊詳細図解	静岡県立図書館
		1878 年	静岡街一覧之図	静岡県立図書館
		1895 年	家系記入静岡市精細地圖	静岡県立図書館
		1926 年	版府御城惣指図	静岡県立図書館
		1926 年	静岡市全圖	静岡県立図書館
		1929 年	静岡市詳細図	国際日本文化研究センター
		1932 年	静岡市全圖	国際日本文化研究センター
		1959 年	静岡市明細圖 (詳細町別番地入)	新日本地図出版
		1990 年	静岡市 (北部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	静岡市ゼンリン住宅地図	ゼンリン
高田	～1900年	不明	旧高田城御旗本家系と親姓名明細圖	岐阜県図書館
		不明	旧高田城分間絵図	新潟県立図書館郷土コレクション
		1805 年	高田城下之図	新潟県立図書館郷土コレクション
	1900 年	1868 年	旧高田藩内絵図	新潟県立図書館郷土コレクション
		1907 年	高田日報附録高田市街之圖	岐阜県図書館
		1907 年	高田明細地圖	岐阜県図書館
		1909 年	最新高田市街明細圖	新潟県立図書館郷土コレクション
		1910 年	高田市街明細地圖	岐阜県図書館
		1912 年	最新越後高田市街圖	岐阜県図書館
		1912 年	最新越後高田市街圖	岐阜県図書館
		1913 年	高田新聞附録高田開府三百周年記念	岐阜県図書館
		1915 年	高田市全圖	岐阜県図書館
		1930 年	名称なし	岐阜県図書館
	1960 年	1930 年	高田市町名改稱新百対照圖	新潟県立図書館郷土コレクション
		1963 年	高田市・舊江津市宅案内図	日興出版社
		1990 年	上越市1 (上越・名立) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
福井	2010 年	2010 年	上越市1 (上越・名立) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		1900 年	市版改定福井市街地圖	国際日本文化研究センター
		1930 年	最新番地入福井市街地圖	福井県立図書館
	1960 年	1957 年	福井市・武生市住宅明細圖	日本地図出版
		1990 年	福井市ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	福井市1ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2011 年	福井市1ゼンリン住宅地図	ゼンリン
名古屋	1900 年	1895 年	名古屋明細全圖	国際日本文化研究センター
		1900 年	名古屋明細圖	国際日本文化研究センター
		1928 年	名古屋市街全圖	国際日本文化研究センター
	1930 年	1938 年	名古屋市居住者全圖 (1929年版)	名古屋市勤舞中央図書館
		1958 年	名古屋市長工住宅案内図帳 (1933年版)	住宅協会
		2006 年	名古屋市居住者全圖 (1926版作)	名古屋市勤舞中央図書館
	1960 年	1955 年	名古屋市長工住宅案内図帳	住宅協会
		1990 年	名古屋市 (北部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		1990 年	名古屋市 (中部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
	1990 年	1990 年	名古屋市 (東部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2008 年	名古屋市6中區ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2008 年	名古屋市3北區ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2008 年	名古屋市2東區ゼンリン住宅地図	ゼンリン
吉田	1900 年	1914 年	豊橋市街圖	岐阜県図書館
		1923 年	豊橋市街圖	岐阜県図書館
		1929 年	豊橋市小字入明細圖	岐阜県図書館
	1930 年	1934 年	豊橋市地圖	岐阜県図書館
		1961 年	豊橋・豊川・御津・小坂井ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		1990 年	豊橋市 (中心) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
	2010 年	2012 年	豊橋市ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2010 年	不詳	不詳
		1913 年	部部編入姫路市街	日本特殊地図協会
	1930 年	1926 年	姫路市全圖	姫路市立図書館
		1930 年	姫路市全圖	国際日本文化研究センター
		1963 年	姫路市全圖	国際日本文化研究センター
姫路	1960 年	1963 年	姫路市全圖	日本特殊地図協会
		1991 年	姫路市 (中心部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
		2010 年	姫路市ゼンリン住宅地図	ゼンリン
	1990 年	1881 年	熊本市全圖	不明
		1925 年	熊本市街地圖	文化歴史資料館
		1950 年	熊本市中央部地圖	文化歴史資料館
		1951 年	熊本市全圖	不明
熊本	1960 年	1955 年	熊本市住宅案内図	日地刊行会
		1971 年	熊本市 (西部) ゼンリンの住宅地図	善隣出版社
		1990 年	熊本市 (西部) ゼンリンの住宅地図	ゼンリン
	1990 年	1990 年	熊本市 2 (西部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2010 年	熊本市 2 (西部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2010 年	熊本市 2 (西部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン
		2010 年	熊本市 2 (西部) ゼンリン住宅地図	ゼンリン

(2013年11月10日原稿受理，2014年 3 月19日採用決定)